もう一つの「ろーぷれわーるど」

ごましお

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
もう一つの「ろーぷれわーるど」

【Ｎコード】
Ｎ２７５７Ｚ

【作者名】
ごましお

【あらすじ】
ごく普通の高校生、鏑正人（かぶらまさと）は、
ゲーム「ギャスパルクの復活」をプレイしていた時に
いきなりゲームの中の世界「エターナル」に引き込まれてしまう！
正人は自分のもといた世界へ戻るため、
使い込んだキャラを使って、冒険する！

作者初執筆なので不満なところだらけだとは
思いますが、温かい目で見ていただけたら幸いです。

ＳＣＥＮＥ１　そんな簡単に信じられるはずがないだろ？！ゲームの世界だなん

作者初の試みです。
気軽に感想をどうぞ。

SCENE1　そんな簡単に信じられるはずがないだろ?!ゲームの世界だなん

視界の一面を埋め尽くしていた光がだんだんと弱まり、
やっと視力が戻ってきた。
体を支配していた浮遊感から一転、どこかへ降り立ったような感覚に襲われる。
たまらず俺は尻餅をつき、そこでやっと状況把握できる状態になった。

「ってぇ・・・ここはどこだ??」

俺は自分の部屋で新しく発売されたゲーム「ギャスパルクの復活」をやっていたはずだ。
それがなんで今こんな大自然にかこまれたフィールドみたいな所にいるんだ??

「夢・・・じゃねえよなあ・・・マジでどこだよここ・・・」

どこを見ても人の気配がない・・・。
それにさっきは夜だったはずだ。なんで太陽が真上にあるんだ?

「ギギギギギギ・・・・」
「?!」

あっぶねえ・・・
なんだこいつは!?
俺の眼の前にある物体?はとてもじゃないが人間とは思えない。
強いて言うなら・・・バッタ?
良く見てみるとそのバッタらしき物の上になにかが表示されてる。

「＜トノサマバッタ＞だ？」

嘘こけ！
日本のトノサマバッタはこんなでかくないし、
襲ってこねえよ！
ってあれ・・・？こんなセリフ俺家でも言ってたような・・・

「うおっ！」

威嚇をしてたと思ったら襲い掛かってきやがった！

「ちょっと待て、なんで襲って・・・ギャアアア！」

右腕のあたりに痛みが走る・・・と思ったが全然痛くねえ？
どーゆーこった？？
なんて不思議に思う暇もねえ！
またきやがった！

「ファイアーボール！」

俺の後ろから声がしたかと思うと、いきなり火の玉が飛んできた。
え？どゆこと？火の玉？

「ギギギギギガアアアアアア！」

その火の玉がバッタに当たるとバッタは苦しそうなうめき声を上げて
消えた。消えた？いや、なんか金色のコインが出てきたけど・・・
バッタは消えた。

「大丈夫かい？」

俺に声をかけてくれたのは日本ではありえない格好をした騎士？のような人だった。さっきのバッタと同じように頭の上に名前？が書いてあったゲームみてえだな・・・名前はクリフというらしい。

「ええ～っと・・・はい大丈夫ですスイマセン。」

「大丈夫ならいいのだが・・・君見慣れない格好をしているね？」

あんたのほうがよっぽど見慣れないわ！！

とは思ったもののそんな発言をするわけにもいかないので、

とりあえず聞いておけることは聞いておく。

「あなたは・・どちら様ですか？それよりここはどこですか？？」

「私は王都ガライアの守護兵でクリフと言う者だ。君は・・・マサトというのか？

どこから来たんだい？」

今どこって言った？王都ガライア？それって・・・

「え～っと僕は・・・ってなんで俺の名前知ってるんですか！？」

今あっさりスルーしちゃいそうになったけど、

この人俺の名前知ってたぞ？！

「知ってるもなにも・・・君の上にある名前を読ませてもらっただけだが・・・」

「え？」

俺の上の名前？
おそるおそる自分の頭の上を見てみると・・・

「な、なんじゃこりゃあ？！」

俺の上には「マサト」という名前表記の下に青いバーが書かれている。
マジでゲームみたいだぞ・・・

「なにやら困惑してるようだな・・・とにかく一回ガライアに来るといい
付いてきなさい」

その後クリフについて草原を歩いた。
そこからは特に変なのも出くわさず歩いていけたのだが・・・。
俺はそんなこと考えてる余裕も無いくらい、焦っていた。
さっき出くわしたバッタといい、この騎士のような人といい、
自分の上にのっかってるバーといい・・・
それらの情報から出てくることなど一つしかない。
＜ここはゲームの世界ではないか？しかも俺がやっていたゲーム、
ギャスパルクの復活ではないか？＞
と俺は本格的に考え始めていた。

@

「うわあ・・・」

色々考え事をしているうちに街についた。
並んだ商店からは客の呼び込みの声が絶え間なく聞こえ続け、
街の喧騒はこの街がどれだけ活気があるかを表していた。

「ようこそ、王都ガライアへ」

俺の隣を馬に乗って歩いていたクリフからまた「王都ガライア」という
言葉が聞こえた。
やっぱりさっきも聞き間違えじゃなかったんだ。
王都ガライア・・・・。

「やっぱり・・・ここはゲーム「ギャスパルクの復活」の中だ・・・」
「ん？なにか言ったか？」
「いやなんでもないです！」

クリフは不思議なものを見る顔をしていたが
俺としてはそんなことは考えていられない。
なにせ、ここがゲームの中だというのだから、考えることが無いほうがおかしい。
なんで俺はゲームの世界に入れられたんだ？
なんのために？
ここがゲームの中ということはさっき俺が襲われたバッタは、
魔物（モンスター）で、このクリフが放った火の玉は魔法ということなのだ。
日本の常識じゃあありえないことだったが、ゲームの中だといわれたら納得できる。

じゃあ俺はどーゆー扱いなんだ？
レベルも無いような商人なのか？
それとも俺が使い込んでいたキャラそのままなのか？
ギャスパルクの復活の中じゃ俺は、俺の使っていたキャラはそこそこレベルが上がっていたはずだ。
せめてステータスウィンドウ「パッ」さえ見れれば・・・

「おい、マサト、ステータスウィンドウなんて道で開けるもんじゃ・・・」

え？なんのこっちゃ？クリフが俺の隣をみて固まっている。
隣？

「うおっ？！」

俺の隣にはゲーム「ギャスパルの復活」で何度も見たステータスウィンドウが開かれていた！
なになに・・・
どうやら見たところ俺がつかいこんでいたキャラをそのまま俺が受け継いでいるようだ。
ってことは、技とか使えんのかな？・・・

「マサト・・・君はいったい何者？・・・・」

やっと体の硬直が解けたクリフが訝しげな目で俺を見てきた。

「え？ああ～すいません！今閉じます！」

そう言って俺が隣を見るとそこにはもうステータスウィンドウは無かった。

もう一度クリフの方を見るとなにやら考えている表情をしたあと・・・

「マサト・・・君をここの王、ガルガンシア王陛下に会わせたいのだが・・・いいかね？」

などと言ってきた。

え？王？陛下？

「えええええええ？！」

この時からもう、冒険は始まっていた。

ＳＣＥＮＥ１　そんな簡単に信じられるはずがないだろ?!ゲームの世界だなん

改めて読んでみると・・・とんでもない駄文ですねｗ
感想をいただけたら幸いです。

SCENE1－2　出会い（前書き）

連続投稿です。

SCENE1－2　出会い

ゲームの世界に来た。来てしまったという事実をつきつけられた翌日。

俺は王都ガライアの城の一つの部屋にいる。クリフに言われて昨日はここで一泊した。

まあ、こっちの世界では俺の家なんぞあるわけもないし、助かるのだが。

野宿なんて無理だって・・・。

一日して分かったことがいくつかある。

まず、なぜ俺がここに呼ばれて王様なんかと会わなくちゃいけなくなったのか。

それはクリフから言うと俺のレベルが桁外れで高いらしいのだ。

日本のゲーマーからしてみれば普通のレベルだと思うのだが、

こっちの世界だと、とんでもなく高レベルらしい。

次に、俺はステータスこそゲームのものを受け継いでいるが、

持ち物は受け継いでいないようだということ。

俺はこっちに来ても学生服のままだし、

荷物も、なにか入ってそうな袋すら見当たらない。

もちろん武器も持っておらず、ろくな装備ではなかった。

でも元からの防御力が高いため、昨日のバッタからの攻撃も

たいしたダメージにならなかったのだろう。
昨日でくわした、＜トノサマバッタ＞はそーとーなザコキャラだったので、ということもあるだろうが。
程なくして、クリフがやってきた。
「起きてるかい？マサト」
「ああ、いくらなんでもこんな時間まで寝てねーよ」
時刻はもう昼過ぎ。
クリフは昨日と同じ騎士のような格好・・・いや、騎士だからいいんだけど。
をしていた。
昨日は鉄仮面をしていて、顔が一部しか見れなかったが
それがなくなっていて、青年的顔立ちをしているのが分かる。
イケメンだこんちきしょう。
「王陛下との謁見の時間がとれた。あと1時間といったところだな。」
「それはいいんだけどさ、俺ってこの格好でいいわけ？」
俺は昨日と同じ学生服だった。
こんなことを言っておいてなんだが、俺は他に服を持っていない。
まあ、荷物が無いんだから当然なのだが。
「ああ、大丈夫だろう。良いとは思わないが、他に服を持っているわけではないんだろう？」
「ああ、生憎な。」
昨日、クリフには少し話をしてある。

とはいっても別にここがゲームの中だとかいう話はしていないが、
自分がなにも持っていないことや、
ちょっと違うところから来たことなどだ。
最初は驚いていたけど、俺の格好を見て
納得してくれたらしい。

「にしても、すごいな俺なんか身元のわからない奴に王様自ら会ってくれるのか？」
「ああ、前もって君のステータスの話はしてあるからな」

あ～・・・なるほどね。

「それと、謁見までの時間なら外に出てもいいそうだから、
好きに街を見てきてくれてかまわないぞ」
「おお～・・・って言っても金持ってないんだが・・・」
「大丈夫だ。見てくるだけだから」

・・・買えないんかい・・・

@

朝食は城のほうで食べさせてもらったので
腹ペコではない。腹ペコではないのだが・・・・

「うわあ！めっちゃうまそーーーー！！！」

商店街に並ぶ数々の飲食店から良いにおいがしてきてたまらない。
食べ物は日本とは違うようで、最初は抵抗があったが
意外と慣れてきて逆に美味しいと思う食べ物も増えてきた。

「くっそう・・・金ないんじゃなにも食べられないじゃないか・・・・
」

学生時代にも金欠状況という状況には何度も味わったが、
今回のこれはそれ以上だ・・・
なにせ金が全く無いのだから。
この状況をどうにかできないものか・・・

その時俺に一つのアイディアが浮かんだ

「ハッ？！・・・なら稼げばいいじゃないか！！」

@

クリフは外に出て良いと行ったのだ。
別にフィールドに出ちゃ悪いとは言ってないので大丈夫だろう。
ということで俺は沼地のフィールドに来ている。

金を稼ぎに！！

「ウリャリャリャリャリャリャ！！！」

出てきたモンスターを片っ端から倒して行く。素手で。
だってしょうがないだろう？！武器買うような金はないのだから！
ってかその金を稼ぎにきてるのだから！

このへんのモンスターは＜ポイズンスラッグ＞と言って、
ベトベトの粘液をまとったナメクジのようなモンスターだ。
確かゲームの中ではたいしたレベルじゃなかったはずだ。
といっても、特殊攻撃として、麻痺毒とダメージ毒を食らわせてくるので
油断してるとまずい。

俺は自慢のＡＧＩ（アジリティ）で素早く魔物の後ろに周りこみ、
一匹ずつ殴って倒していった。
＜ポイズンスラッグ＞は動きがのろいので、
後ろに周りこむことは案外簡単だった。
さっきっから、手が粘液でベトベトになってるのは頂けないけどね・

・・
ネトネトして気持ち悪いったらありゃしない。
「うらあ！」
一発拳を入れると＜ポイズンスラッグ＞のＨＰバーが瞬く間に真っ白になり
うめき声を上げて液状になっていく・・・って
「おいおい・・・金が粘液まみれって・・・マジで勘弁してよ・・・」
そんなところにリアリティ求めてねえよ！！
@
２０分ぐらい経っただろうか、
周りにポイズンスラッグはいなくなっていた。

「けっこうたまったなあ俺のG！」

この世界の金の単位はGと言うらしく、ごく普通のコインだ。
日本円でどれぐらいの価値があるのかは分からないが・・・

「キャアアアアアアアアーーー！！」

「？！」

なんだ！？今のは？！
聞いたところ人間の・・・女性っぽかったぞ？
とりあえず今の悲鳴はヤバいんじゃないか？！
悲鳴がしたほうは・・・・あっちか！
急いでいかないと！！

@

「大丈夫か？！」

悲鳴がしたほうを目指して走っていくとそこには尻餅をついている
一人の女・・の子？と・・・

「＜オールドスラッグ＞・・・」

そこにはさっきまでの＜ポイズンスラッグ＞とは比にならないほどの巨大な
ナメクジが少女に迫っていた。
頭上に表示されるモンスター名は、＜オールドスラッグ＞
この地帯に稀にでるボスモンスターだ。
動きは遅いものの、強酸、猛毒の広範囲攻撃があり、
なめてかかると全滅の恐れがあるモンスターだ。

「大丈夫か？！ほら立って！」
「ア・・・アア・・」

少女はこの巨大なモンスターを見て腰を抜かしてしまっているようだった。
このままここにいたら、狙われちまう！

「ちょっと失礼する！」

そう言うが早いか俺は少女をお姫様抱っこ？し、
少し後方まで逃げてそっと少女を降ろした。

「これで一安心・・・なわけないか」

後ろを見るとすでに＜オールドスラッグ＞が追ってきていた。
正直ここまでデカい相手に素手で戦える気はしない。

「使える魔法あったっけなあ・・・」

俺は魔法使い職ではないが、ちょっとだけ攻撃魔法を覚えている。
といってもそこまでの威力はないんだけど・・・

「もうしょうがねえ！＜エアブラスター＞！！！」

＜エアブラスター＞は風属性の単体攻撃魔法で、
レベルは中級と言ったところか・・・俺の中では最強魔法なんだけどね・・・
ああ・・・ＭＰ（マジックポイント）めっちゃ減った・・・

俺がそう叫ぶと俺の手から緑色の刃のようなものが二つ出てきて、
＜オールドスラッグ＞を切り裂く！　おおコレカッコイイな・・・

「ギガガガガガ・・・」

避ける事ができずにモロに魔法を受けた＜オールドスラッグ＞は
呻き声を上げて液状になっていった・・・
正直、魔法に自信はなかったのだが、俺自身のレベルが高かったので
どうにかなったようだ。

いつもどうり粘液まみれのＧを回収して・・・
とりあえずさっきの女の子のとこ行くか・・・

「あ・・あの・・」
「あれ？」

今行こうとしてたのに、むこうのほうから

来てくれたみたいだ。表示されている名前は・・・・・・シオリ
日本名だなこれは・・・いや、そう断定するのは早い気がするけど
そんな気がする。黒髪黒瞳だし。
この世界では黒髪黒瞳は珍しいと言っていいだろう。
ほとんどの人がいろんな色の髪をしている。

「た、助けてくださって・・・あ、ありがとうございました」

シオリは蚊の鳴くような小さな声で喋った。
容姿は、黒髪黒瞳、
髪にはゴムを、それぞれ正面から見て端っこについていて、
結んでいた。
二つ結びってやつかな？

「いや、大丈夫だよ、そっちこそ大丈夫？怪我はない？」

見たところＨＰバーは減っておらず、どうやら＜オールドスラッグ
＞のデカさ
と気持ち悪さに腰を抜かしてしまったのだろう。

「だ、大丈夫です・・・」

うん、一言で言うなら「美少女」だ。
普通に可愛いぞこの子！

「ところで・・・君はここでなにをしていたの？
名前が特徴的だけど・・・もしかして日本から来たりしてない？」

俺の「日本」という単語にピクン！とシオリの肩が動いた。
こりゃあどうやら日本人で間違いないみたいだな・・・

格好はこの世界の人たちとなんら変わりなかったので最初は気付かなかったが
むこうは俺の着ている学生服で気付いていただろう。

「マ、マサトさんも日本から来たのですか？」

「そうだよ、俺は日本では高校1年生だった。君は・・・シオリちゃんでいいのかな？
どうしてこの世界に？」

俺がこのことを聞いたのには訳がある。
俺のほかにもこっちの世界にきたやつがいるなら、
俺と同じように訳もわからず来たやつばかりだろう。
でもこの子に聞いたのはそういう意味じゃない。

もともと、このゲームを少女がやっているなんてこと自体が珍しいのだ。
もしかしたら趣味なのかもしれないけど、喋っている雰囲気からしてそうでは無い気がする。勘だけど・・・

「わ、わたしは・・・あ、兄がこのゲームをやっていて、
そのデータの一つに私も入れてもらってやっていたのです。
わ、私がやることはあまりありませんでしたが、
あ、兄が私のも使って2つ同時にやっていました。」

へえ・・・
でもそれじゃあなんでこの子がこっちの世界に来たんだ？・・・

「それで訳もわからずこっちの世界にいきなり？」

俺の質問にシオリちゃんは少し寂しげな表情をしたあと、

「わ、私の兄が、ゆ、行方不明に・・・なったんです。
そ、それで兄の部屋で付いていたこのゲームを、
わ、私が私のデータを使って少し動かしてみたのですが・・・」

そこまで言うと、シオリはそのまま俯いてしまった。
まあ、多分そしたら引き込まれたのだろう。

「大体分かったよ。・・・で、シオリちゃんはこれからどうするの？」

俺としてはもう少し話しがしたい。なにせ、こっちの世界で会った初めての
日本人なのだから。
正直俺は俺以外にこっちの世界に来てる人はいないんじゃないかとも思っていた。だからこれは大きな出来事だし、色々な情報が手に入るかもしれない。

「そ、そのことについてなんですけど・・・」

「ん？」

シオリは俯いたまま続けた。

「ず、図々しいとは思いますが・・・マ、マサトさんについていかせてもらっては・・・だ、ダメでしょうか？」

こんな女の子に「ダメでしょうか？」なんて言われて「ダメ」なんて言える高校生がいたら見て見たいわ。

そいつは絶対男じゃねえ。

「いいよ！俺もそうしようかと思ってたし。」

俺がそういうとシオリはパアーッと明るくなってこちらを見てきた。本当に美少女だこりゃ

「じゃあ俺の本当の名前を教えておくね。俺は鏑正人(かぶらまさと)だ」

「わ、私は、は、春風汐理(はるかぜしおり)と言います。よ、よろしくお願いします！」

なにはともあれ、これで仲間が増えた・・・のかな？

「・・ってヤベっ！あと15分じゃん！汐理！急いでガライアまで行くぞ！」

「が、ガライアですか？」

「そう！王様と謁見するらしい！」

「へ？」

二人でガライアまでの道を急いだ。

ＳＣＥＮＥ１－２　出会い（後書き）

オリキャラです。
ユーゴたちはもう少し先になりそうです。
次会エル登場の予定です！

ＳＣＥＮＥ１－３　登場人物のステータス（前書き）

非公開だった正人のクラスなどを公開します！

SCENE1ー3　登場人物のステータス

～鏑正人（かぶらまさと）～

Class　ファドラガンナー

LV　71

HP　621／621

MP　309／309

AGE　15

SEX　男性

RACE　人間

STR　443

VIT　312

DEX　781

AGI　746

INT　202

WIS　179

LUK　168

ー備考ー

正人のクラス「ファドラガンナー」とはその名の通り風神ファドラの加護を得た銃使い（ガンナー）のこと。
風属性魔法なら少し使える。
主武器は銃で、弓矢も使える。
ＤＥＸとＡＧＩが高い。

～春風汐理（はるかぜしおり）～

Ｃｌａｓｓ　トラップチーフ
ＬＶ　５２
ＨＰ　５１１／５１１
ＭＰ　６２８／６２８
ＡＧＥ　１１
ＳＥＸ　女性
ＲＡＣＥ　人間
ＳＴＲ　１８７
ＶＩＴ　１９０
ＤＥＸ　６５８
ＡＧＩ　４２３

INT　141
WIS　691
LUK　322

ー備考ー

汐理のクラス「トラップシーフ」とは盗賊(シーフ)の派生系で、
確率魔法に分類される、罠魔法(トラップ)を得意とするクラス。
それ以外の魔法も状態異常回復魔法なら使える。
主武器はダガーで軽い剣なら扱える。

SCENE1ー3　登場人物のステータス（後書き）

オリキャラを出す事があったらこのように
ステータスを紹介していきたいと思います！

SCENE1－4　謁見（前書き）

原作知識が薄れていて、時系列が思い出せない・・・

SCENE1－4　謁見

汐理との思いがけない出会いを果たし、
俺たちはガライアへの道を少し急ぎながら歩いていた。

「あ、あの正人さんはいつこっちに来たんですか？」

「正人、で良いよ」

隣を歩いてるこの子が汐理。
聞くと年齢は１１歳だという。
１１歳って何年生だ？・・・

しかし、そんな小さな体型とは裏腹に、エターナルでの
ステータスはＬＶ５２のトラップシーフだと言う。
トラップチーフといえば盗賊系の派生系で罠を得意とする職業だっ
たはずだ。
昨日俺がクリフにされた反応からして、汐理もかなりの高レベルな
のだろう。

っと、質問に答えてなかったな。

「俺は実は昨日なんだよ。だから武器もなにも持ってないわけ。」

「そ、そうなんですか。」

「汐理は今さっきってわけか。」

「そ、そうなります・・・」

いきなり転生させられて初めてみるモンスターがあれじゃあ
可哀想だな・・・
あ、汐理にこれからなにをするのかを言ってなかったけな・・・
「汐理は今からなにをやるか、知ってるっけ？」
「え、謁見なさると聞いていましたが・・・」
１１歳なのに謁見を知ってるのか？
だとしたらすごいな・・・俺は知らなかった。
「そう、俺たちはこの先にある都市、王都ガライアの王様
ガルガンシア王に会いに行く。って言ってもなにをするのか知らない
んだけどね・・・」
「え？それって、よ、呼び出されたということですか？」
俺の発言に汐理は困惑した表情を浮かべる。
「いや、昨日俺が転生した時になにが起こったのか分からなくて
魔物に襲われていたんだけど」
実はザコキャラでした！なんて口が裂けてもいえない・・・
「その時に助けてもらった人がガライアの騎士でね、
俺のステータスを見せたら王様に会わせたい・・・と言ってきたわ
け」

汐理は「な、なるほど」と言ったあと
前を向いてなにかを考え始めたようだった。
まあ、俺より来て時間が経ってないわけだし、
しょうがないよな・・・

そうこうしてるうちにガライアまで着いた。

「ここが王都ガライアだよ・・・ってまあ、俺もここにきて全然経ってないんだけどね」

俺が一応ガライアを紹介すると、
汐理は感動したと言った表情で街を眺めていた。
俺もクリフに連れれれていた時はこんな表情してたかもな。

そのあとも、汐理と話をしながら城へと向かって歩いていった。

@

「エルトリーゼ様！昨日申し上げました、
例の者達を連れてまいりました！」

少し狭めの客室に、クリフの声が響く。
そうして向こうの扉から出てきた人は・・・人？
いや、あれは・・・エルフだ。
耳が長いのですぐにわかった・・・けど、エルフってこのへんに
いたっけ？・・・

「私がエルトリーゼ・ウィンラートだ。陛下に仕える宮廷魔術師の
一人である。」

いかにも「できる女」といった雰囲気をまとった人・・・エルフだ
った。
金髪の長い髪を後ろでまとめて、長く降ろしている。
マントのようなものを羽織っていて、かなり魔法使いとしても
レベルが高いんだろう・・・推測だけど。

「マサトです。で、こっちが・・・」

俺が視線で汐理を促すと、

「し、シオリです。」

やたら緊張してるな・・・

「君はかなりの高レベルなのだと、クリフから聞いているんだが・・・

それは本当か？失礼だとは思うが、ステータスを見せてもらってかまわないか？」

エルトリーゼさんはまだ疑っているようだった。

まあ、無理もないだろうな。

「はい大丈夫です。」

そういうと俺は心の中で「ステータスウィンドウ」と呟く。

どうやらこれだけで、ステータスウィンドウは開けるらしい。

汐理にもこのことは伝えてあるので、開くことはできるだろう。

エルトリーゼさんは俺たちの開いたステータスウィンドウを見て、ものすごく驚いていた。どうやら信じてなかったみたいだな。

「マサトが高レベルだとは聞いていたが、シオリまでとはな・・・

分かった。ガンガルシア陛下の所まで案内しよう。付いて来い」

エルトリーゼさんは俺たちに有無を言わせぬ口調でそういうと

颯爽と身を翻して扉のほうへ歩いていった。

これだけで終わったってことはどうやら確認だけだったみたいだな。
確かにそんな嘘をついて王に直接会おうとするやつもいるだろうし。
そんなことを考えながらエルトリーゼさんを追った。

@

今度は広くきらびやかな広間に通された。
廊下を通っているときにも思ったけど・・・
城だからと言って、やたらと装飾がしてあるわけではない。
かといって、ちょっとしたところに絵画が並んでいて
貧相な感じは全くしなかった。

こういう面から見ても、街の活気から見ても
ここの王様はかなりの人格者なんじゃないかと思う。
少し行ったところに玉座があり、そこに座っているのが
王様だろう。その隣にいるのは誰だ？・・・っつ？！

「が、学生服・・・！」

俺の後ろを歩いていた汐理が先に言葉を発した。
そう、王様の隣にいる女性は女子高校生お馴染みのセーラー服を着
ていた。

「君がマサト君か。余がガンガルシア三世である。」

おお・・・見た目からしても風格のある人だ・・・
頭の上には少し小さめな王冠が乗っていて、
さっきのエルトリーゼさんのとは違うが大きめのマントを羽織って
いる。
歳は・・・５０、いや６０ぐらいだろうか。

「はい私がマサトです。こっちにいるのがシオリ。
お目にかかれて光栄です陛下。」

最初はこの人の持つ特有の威圧感に押しつぶされて、
言葉が出なかったが、すこし慣れてきた。

「自己紹介が終わったところで早速なんだが・・・
単刀直入に聞こう。君たちはニホンという異国から来たのかね？」

え？・・・この人日本を知ってる？
いや、違うだろう。今なんとなく日本の発音が怪しかったし、
おそらく隣にいるセーラー服の人が教えたんじゃなかろうか。

「はい、そうです。」

「やっぱりね。」

俺の返答に反応したのは、隣のセーラー服の人だった。
黒髪をカチューシャでかきあげて、髪は肩ぐらいまでかかっている。
腰には長剣が鞘に収められている。

「申し遅れたね。私の名前はナツキ。
旭日騎士団と呼ばれる、ニホンジンで組まれた組織のメンバーよ」

旭日騎士団？・・・それがどういうものなのかは分からないが
日本人で組織しているということは
高レベルの人たちの集まりなのかもしれない。

「聞きたいのだが、君たちはなんの目的を持って旅をしているのかね？」

あんれえ？話行ってないのかな・・・
俺たちがエターナルに来たのが昨日なので目的なんてあるわけないし、
そもそも旅なんてことをしてるつもりすらない。

「えっと・・・私たちは、まだこちらに来たばかりで、
目的などは特にありません。強いて言うなら、日本に帰ることですかね・・・」

そう言うとナツキさんの目が少し鋭くなったが、王様は特に表情は変わらなかった。

「そうなのか・・・ではこちらから提案があるのだが・・・ナツキ君」

「はい。　簡単に言うとね、君たちに旭日騎士団のメンバーになって欲しいの」

や、やたら説明を省いた気がするんだが・・・・

「あ、あのいきなりの提案で旭日騎士団がどのようなものなのかも分からないので
さすがにすぐには返答できないんですが・・・・」

「うむ。そうだな。ならこのナツキ君から話を聞いたほうがいいだろう。
君たちにはこの城で少しの間住むことを許可する。
ナツキ君から説明を聞いて、それで入るか決めてほしい。
余もそこまで騎士団については詳しくないのでな。
入るかどうか決定したら、また報告してくれ。」

住むところのあてがなかった俺たちにとってはありがたい話だ。

「わかりました。」

「うむ。ではナツキ君。この戦士たちと少し行動をともにしてくれ。
決定したことがあったあら余に報告して欲しい。」

「分かりました」

そう言ってから最後にガンガルシア王は俺たちの方を向いて

「君たちには多いに期待している。頼むぞ異国の戦士たちよ。」

な、なにを頼まれたかすら分からないんだが・・・・

「はい」

ナツキさんがそう答えて謁見は終了となった。

SCENE1－4　謁見（後書き）

エルとナツキを出してみました。
お気軽に感想を書いてください。
自分のためになると思うので、ダメだしでもお願いします！

SCENE1－5　旭日騎士団（前書き）

原作で、ナツキの日本名って明かされてないですよね？
勝手に決めてしまって良いのでしょうか・・・
もしこの作品が続いている途中に明かされたら
編集するかもしれません。

SCENE1－5　旭日騎士団

ガルガンシア王との謁見を終えたあと、
俺たちはナツキに案内されて、城の中にある
一つの客室に案内されていた。

部屋はたいして大きくないが、
客室ということを考えれば
充分広いと言える広さだった。

「とりあえず、座って」

ナツキに促されて俺と汐理は客室の中心にある
テーブルの椅子に座った。

「とりあえず、さっきも言ったけど私はナツキ
日本名は皆川夏喜（みなかわ なつき）よ。
旭日騎士団っていう騎士団のメンバーで、
そのことをここのガンガルシア王に話してる途中に君たち
マサト君たちの話が入って、日本人じゃないかなって思って
謁見してるところにもいさせてもらったわけ。」

なるほど、だからナツキさんに対する王様の口調も
俺らとあんまり変わらなかったのか。
そもそも仕えてるならあんな風に隣になんかいないか。

「そうですか。それでその旭日騎士団というのは

どういったものなんでしょうか？」

「私達の目的はこのエターナルを滅ぼし、支配せんとする、同じく日本人の組織
＜教団＞を倒す、倒すとまでいかなくても、教団の脅威を色んな国に警告すること等ね」

教団？・・・名前からして怪しそうな名前だな・・・

「教団は魔神にして魔王、力の神とも呼ばれる＜ギャスパルク＞の復活を目的としているわ」

な・・・なんだって？
隣をチラっと見ると汐理も俺と同じような反応をしていた。
汐理はそこまでこのゲームに詳しくないが、話を聞いて理解できたのだろう。

「そこで、私達はいま、エターナルに来た日本人を教団より早く騎士団に招き入れることをしているの。」

教団なんかに入ろうとする人なんているのか？？
それこそそんな目的を掲げているなら、善意のある人なんかは入らなさそうなのに。

「教団ってのはそんな目的を持ってるっていうのに入ろうとする日本人がいるのか？？」

俺の思ったことをそのままぶつけた疑問にナツキさんは
「あなたの言う事ももっともだわ」と前置きしたあと、

「でもね、確かに教団がそんなことを言いながら勧誘してたんじゃあ
人は集まらないと思うけど、実はねあいつらは＜自分たちにつけば
日本に帰る方法を教える＞
と言って勧誘をしているのよ」

その言葉に俺は愕然とした。
だって・・・さっき俺「帰ることが目的だ」って言ったんだぞ？
もし、教団にそんなこと言われたら本当の目的も知らずに
教団のメンバーになっていたかもしれない・・・

そんな俺の心情を見抜いたのか、ナツキさんはこう続けた。
「だから、そうして教団のメンバーになっちゃう前に
先に私達から注意を促してるの」

なるほど・・・

「他の旭日騎士団のメンバーは？」

「今は私と同じように色んな場所で注意を促してるわ。」

なるほど・・・これならこの騎士団は信じられる気がする・・・
というより、俺たちはこれからなにをするのかも決まってなかったし
同じ日本人と行動できるなら願ってもないことだ。
ま、最初から断る理由はなかったんだけど。

「分かった。俺たちは＜旭日騎士団＞のメンバーになるよ。
汐理もそれでいいか？」

勝手に話を進めてしまったが、汐理に許可を取って無かった。

大丈夫かな？

「は、はい。も、もともと私は正人と行動を共にすると言っていたので
正人が入ると言うなら、わ、私も入ります」

「へえ・・・？」

なにやらナツキさんがじろじろ見てくる。
汐理は俯いたまま固まってるし
なんなんだ？？

「とにかく。そーいうことなんで、入らせてくれますか？」

「当たり前でしょ！そのために私はあなたと話しをしにきたんだから」

「じゃあ、改めて自己紹介しておこう。俺はマサト、日本名は鏑正人だ。ナツキさん
これからよろしく！」

「わ、私は春風汐理です・・・よろしくお願いします」

「私のことはナツキでいいわよ、二人ともこれからよろしく！」

かくして、俺は旭日騎士団のメンバーになった！

「ところでさ、俺らがメンバーになったこと団長とかに伝えなくて

いいのか？」

「あ～・・・あ～」

ん？ナツキがいきなり唸り声を上げている
いきなりどうしたんだ？？

「え～っと、団長はいいから、副団長には私から伝えとくよ！」

団長の扱いひどいな・・・
なんでそんな扱いなんだ？？

そして、このナツキはけっこうテンションが高いんだな。
あれだ、あれ！クラスとかで言う活発系女子ってやつ？

「そ、それでナツキさんは私達のパーティに加わるという事でいいのですか？」

汐理の質問は質問というより確認・・だろう。

そう、このエターナルという世界では複数の人間が
グループを組織して色んなところに行ったりすることをパーティというらしい

まあ、なんのゲームでもパーティって言葉は結構聞くと思うんだけど・・・

べつにパーティだからといって持ち物が共有されるってわけでもないんだけど、
決まりを作ってそーゆー風にしてるパーティは多いらしいけどね。

「そうなるね。王様からも一緒に行動しろって言われてたし、
そーゆーことになるかな。そーゆー意味も含めて、よろしくね」
ナツキってけっこう爽やかだな。
「それで、俺たちはこれからどうするんだ??」
まあ、ここの城に住むことになるって言ってたし、
他の日本人捜索かな?
「そうだね・・・とりあえずこのまま日本人捜索を続けて、
副団長と話ができたら、それからまた考えよう。それまではこの三
人で行動だね!」

なるほど・・・まだ俺たちは情報が足りないから、
ナツキに色々聞いて情報を得るとするか・・・
「じゃあ私はガルガンシア王に伝えてくるね!」
そう言い残すと、ナツキは駆け足で客室を後にした。
「お、思ったんですが・・・」
汐理と二人きりになってすぐ、汐理が話しかけてきた。
「どうしたの??」
「こ、これからは私たちが会う日本人全てが、み、味方じゃないっ

てことですよね」

そうだった・・・
教団という敵がいる以上、
これからは全ての日本人を疑ってかからなけりゃならないってことだ。
もしかしたら俺たちのことが教団に知れて、俺らに近寄ってこないとも限らない。

でも・・・寂しいな、同じ日本人なのに、
こっちのエターナルの世界で殺しあわなきゃいけないなんて・・・

「そう・・・だね。これからは注意していこう」

汐理も俺と同じようにかなり悲愴な顔をしていた。
おそらく俺と同じことを考えていたのだろう。

これから始まることは俺は全く考えられない。
俺たちはなんのためにこのエターナルという世界に放り込まれたのか？
こうして、殺しあうことなんかが目的だったのか？

まだ、分からない
分からないことだらけだ。
けど、俺たちがここでくすぶってるわけにはいかない。

俺たちが戦うことで、少しでもこの世界のためになるのなら
戦うべきだろう。
今はそれが、俺がこの世界に放り込まれた理由、目的。
だったらその目的を真っ当してやろうじゃないか。

「汐理、こらからは戦うことになると思う。
もしかしたら・・・いや、もしかしなくても身を危険にさらすことになる
それでも・・・俺についてきてくれるか？」

「はい。私は正人についていきます。日本に戻るまで、絶対に正人のそばは離れませんよ」

そう言って汐理は微笑んだ。
めっちゃ可愛いぞおい・・・

「よし！じゃあ絶対俺は汐理を守ってやる！
これからもよろしく頼むぜ！」

「はい！」

汐理がこんなにハッキリと喋ったのは初めてかもしれない。
しかも汐理だってレベルはすごく高いのだ。
俺なんかに守ってもらわなくてもと思ってもおかしくないのにしっかり答えてくれた。

それがなんだか、俺にとっては一番嬉しかった。

ＳＣＥＮＥ２　平和の尊さって失って初めて気付くんですね　～春風汐理～（前

お気に入り登録をしてくださった方々、
本当にありがとうございます。
発投稿の自分としてはとても感激です！
お気軽に感想をお願いします！

ＳＣＥＮＥ２　平和の尊さって失って初めて気付くんですね　～春風汐理～

初めまして、春風汐理です。
私はちょっと前まで市内の小学校に通う普通の、小学六年生でした。

全てが始まったのはあの日・・・

私は学校から帰って、いつものように読書をしていたのですが
いつまでたっても兄がリビングに顔を出さないのです。

私の家は兄と、私と母の三人でした。
母は仕事で帰ってくるのが夜遅く、
いつも兄と二人でいるのが普通でした。

兄妹仲も悪くはなく、むしろ良好と言ってよかった関係だったと思います。

気付けばもう時計は夜の7時を回っていました。
普段なら、夕食の準備も初めて作り始めている時間です。

さすがに違和感を感じた私は、兄の部屋へと向かいました。

そこに待っていたのは、付けっぱなしの明かりと
不自然に投げ出されたゲームのコントローラー。
そして、付けっぱなしの、ゲーム。

兄の姿はありませんでした。
実際、その時はどこかに行ったのだろうと思い、
ゲームは消さずに兄を探しに行きました。

トイレ、浴室、物置、玄関。

ついには家を出て、近くの公園まで。

どこにも、　どこにも兄の姿はありません。

途方に暮れた私は、もう一度兄の部屋に戻りました。
兄の部屋はさっき見た部屋となにも変わらず、
相変わらずゲームのＢＧＭだけが虚しく響いていました。

私は兄の悪戯かと思い、兄の部屋の捜索を始めました。
この時は「兄が消えた」などありえないと信じて疑いはしませんでした。

（汐理・・・）

「？！お兄ちゃん？！」

突然聞こえた兄の声に私は敏感に反応します。

（し、汐理・・・）

消え入りそうな小さな声。
普段の兄からは全く想像もつかない声。

「お兄ちゃん！？どこなの？！」

（僕は・・・ここにいるよ・・）

それだけ言って兄の声はまた聞こえなくなりました。

しかし、私は感じていました。
今声が聞こえてきたのは、
この・・・ゲーム。
このテレビからでした。

「お兄ちゃん・・・ここに・・・いるの？」

私の質問に応答する兄の声はありませんでした。

しかし。
いつのまにかさっきとは、
テレビの画面が変わっていました。

私も兄といっしょに少しだけこのゲームをやったことがあります。
この画面は・・・最初のゲームを始めるセーブデータを選ぶ画面。

私の兄は優しく、私がゲームをやらないことを分かっているのに

わざわざ私のデータを作って兄が進めてくれていました。

そして、私はコントローラーに触っていないのに、セーブデータを選ぶ画面に映るカーソルは
データ2の「シオリ」をさしていました。

まるで「選べ」とでも言うような画面に、
私は背筋が寒くなるのが分かりました。

恐る恐るコントローラーを手に取り、決定を示すAボタンを私は押しました。

押してしまった・・・のほうが正しいかもしれません。

（汐理・・・ごめんな）

兄のその声が聞こえたかと思うと、
私の視界は白い光だけに埋め尽くされていました。

@

ナツキと会ってパーティーを組んでから一週間ぐらいが経ちました。
私達が今いるのは王都ガライアの商店街の中です。

「ん～・・・しっかしやっぱそう簡単に日本人なんて見つからないか・・・」

隣を歩いているこの人は、正人。
エターナルに来ていきなり死んでしまいそうなところを
助けてもらった命の恩人です。

私はこの正人についていくと決めました。
その理由は命の恩人ということもあるのですが、
この人・・・似ているのです。
行方不明になった私の兄と。

ですがそんな理由を話せば、正人に愛想をつかされてしまうかもしれないので、
このことは言っていません。

「ん～・・・まあ、あなたたちの情報を手に入れるのにも一苦労だったからねえ」

この人が、ナツキ。
旭日騎士団という日本人で構成された騎士団のメンバーで
私達をスカウトした人です。

私達、正確には正人と私ですが、
ナツキにスカウトされて、旭日騎士団に入りました。

なんでも、このエターナルを滅ぼそうとする教団なる組織があるとか・・・
それに対抗するために、高レベルの日本人を教団より先に
スカウトして旭日騎士団に引き入れようとしているのです。

これがそう簡単なことではなく、
こうして歩いて情報を仕入れるところから始めなければならないのです。

今日も捜索してもそれらしい人影や、
いい情報を手に入れることはできないでいました。

「じゃあ、今日もちょっと外でるか？」

「そうね、後々のためにもそのほうが良いと思うし」

「あ、ありがとうございます」

外に出る・・・というのは、
フィールドに出るのであって、
目的は・・・恥ずかしながら私の修行です。

私も日本人で、兄がこのキャラを使ってプレイしていたので
レベルは低くないのですが・・・

画面で見るモンスターと本当に相対するモンスターとでは
比べ物にならないほど違うのです。

迫力、こちらを本当に殺そうとする殺意、
威圧、威嚇。
最初にこれをモンスターから受けたときは、
腰が抜けてしまって、戦うなんてこと、考えもできませんでした。

これでは、いくらレベルが高くても、

攻撃できなきゃ意味が無い。
そう考えたナツキと正人がたまにこうして
フィールドに一緒に出てくれて、
私のモンスター慣れを手伝ってくれているのです。

私もパーティにいる身として、
お荷物では嫌なので助かるのですが、
この時点でお荷物な気がして怖いのです。

「いたぞ！」

正人の声にハッとしてそちらを向くと、
数多くのこうもりがこちらに向かってきてるではありませんか！
表示されている名前は・・・＜ストームバット＞

「や、厄介ね。魔法使い職がいない私達にとってみればちょっと骨がおれるかもよ？」

「一応回復用スペルスクロールを持ってきてるし、
俺は風魔法を使う！戦ってみよう！」

スペルスクロールとは、魔法使いが魔法を巻物のようなものに保存しておくものです。
これは商店などにも売っていて、
魔法使い職のいない私達にしてみれば、必須アイテムなのです。

「＜ウィンドウブラスト＞！」

正人が風属性の範囲魔法を唱えます。
前方の群れのＨＰが下がりますが、
ゼロになったのは一匹もいません。

「よし！」

今度は正人が両腰に付けたホルスターから二丁拳銃を取り出し、
一匹ずつ打ち落としていきます！
早い！ストームバットたちが次々に断末魔の叫びを上げて落ちていきます

「じゃあ私も・・・＜ソニックブーム＞！」

ナツキが自身の長剣を抜き放ち
同時に鋭く振りぬくと、放たれた青い衝撃波がストームバットに当たり、
墜落させました。

「汐理！」

「はい！」

私も、別にその二人の技をただ見ていたわけではなく
ちゃんと技の準備を整えていました。

「ふ、二人とも退いて！」

私が声をかけると、二人は勢いよく後ろに下がり、

二人がいた場所にストームバットの群れが集結します。

「罠(トラップ)<ネットバインド>！発動！」

私の職業(クラス)は<トラップシーフ>と言って
罠(トラップ)という確率魔法とダガーの扱いを得意とするクラスなのです。

この技は集団の敵に対して、一定時間拘束する効果を持ちます。

私が叫ぶと、私が準備しておいた左右のトラップツールから、
大きな透明の網が飛び出しストームバットたちの動きを拘束します！

「今だ総攻撃！」

私もダガーを引き抜き、網にかかったストームバットたちに斬りかかりました。

@

「いやあ・・・ダメージゼロだったね」

ナツキが苦笑しました。さっきの戦いでのＨＰの消耗はゼロ。
被害はありませんでした。

「汐理、モンスターにはだいぶ慣れてきた？」

正直に言うと、まだ怖いです。
でも、これ以上二人に迷惑をかけるわけにもいかないし、
全く改善されてないかというとそうでもないので、

「は、はい。もう、だ、大丈夫だと思います・・・」

「ん、じゃあこれからは少し感覚を空けて
定期的にやるとしよう。」

正人は私の意志を汲み取ってくれたらしく、
私の望む返答をしてくれました。
本当にお兄ちゃんみたいです・・・

「じゃあ一回ガライアに帰って、今日は休もうか」

今まで暮らしていた、平和な日本が
どれだけ貴重なものだったか、
こうもしないと分からないなんて
皮肉もいいところだと思います・・・

え？「お前よく喋るんだな」って？？

わ、私の頭はいつだって高速回転してるんです！
ただ、言葉にして発するとなると、頭の回転が早すぎて
言葉を選ぶのに時間がかかってしまうというか・・・

ＳＣＥＮＥ２　平和の尊さって失って初めて気付くんですね　～春風汐理～（後

ナツキの職業も明かされてなかったですね・・・
剣を持っているとしか分からないだなんて・・・

SCENE2－2　ゴーデスナイト

「副団長と連絡が取れたから、ちょっと会ってくるね！」

ナツキがそう言い出したのは、
ストームバットの群れを倒した日の翌日のことでした。

「そうか！じゃあ俺たちのことも伝えておいてくれ」

「もちろん！じゃあ・・・3日後には帰ってくると思うから
それまで行ってくるね！」

ナツキは旭日騎士団の副団長に会いにいくといいます。
私達も直接会ったほうがいいか、と正人が聞いたのですが
大丈夫だよの一言で片付けられてしまいました。

ナツキはそう言うと、荷物をもって
すぐに部屋から出て行きました。

「えらい急いでたなあ・・・？」

それは私も思いました。
まあ、旭日騎士団のメンバーは色々な場所
に散っているというのですから、
会える時間はすごく短いのかもしれません。

「ところで旭日騎士団ってどれくらいメンバーいるんだろうな・・・
」

結局正人のその疑問には二人で結論を出す事はできませんでした。

@

ナツキが出ていってから３０分後くらいのことでした。

「マサト、いるか？」

「はい。います」

ガチャ・・・扉を開けて入ってきたのは、
エルトリーゼさんでした。

エルトリーゼさんはガライアに仕える宮廷魔法使いの一人で
ＬＶ３５の＜パイロマンサー＞です。
エターナル人としては、かなりの高レベルなのですが
私達日本人からしてみると少し低いですね。

「どうかしたんですか？エルトリーゼさん」

「私のことはエルでいいぞ。みんなそう呼んでいる。

・・・実はな、君たちと同じように高レベルな人間がガライアにやってきている。」

「えっ？」

それって日本人ってことだよね・・・

「それで王との謁見を望んでいるのだが・・・マサト、君はどうするべきだと思う？」

エルトリーゼさんが気になっているのはきっと教団・・・のことだろう。
もし教団のメンバーなのだとしたら、ぬけぬけと王様の前に出すわけにはいかない。

正人は少し黙考したあと、

「・・・俺たちの時みたいにエルが先に会って人柄を見るべきじゃないかな？
それで大丈夫そうなら王の前に通せばいいし・・・」

と提案しました。

私もそれで良いと思う。
最悪、教団ということになったら私達がかけつけて戦っても良いし。

「そうなんだが・・・」

エルトリーゼさんはまだ難しい顔をしている。
なにを悩んでいるのだろう？

「すまないんだが・・・君から王陛下にそのことを
告げてくれないか？」

え？何故私達から？

「え？どうしてさ？」

正人も私と同じようなことを思ったようです。
ハッ！まさか・・・

「も、もしかして王様自ら謁見を望んでいらっしゃる・・・という
ことですか？」

私が恐る恐る口にすると、
エルトリーゼさんは一瞬驚いたあと

「そうなのだ・・・」

どうやら宮廷魔法使いも楽じゃないみたいです。

私達は最初に謁見をした広間にやってきました。

「王様はそのものたち直接会いたい・・・ということですか？」

切り出したのは正人だ。

「うむ！君たちのような者なら是非会ってみたいと思うておる」

それが教団のメンバーだったらどうするんですか・・・・

「しかし、陛下！必ずしもマサトたちのような良い人とは限りません！」

エルトリーゼさんが抗議する。

私達を良い人って言ってくれたのは嬉しいな

「う～む・・・じゃが私も人柄を見極めたくてのう・・・」

もしかするとこの王様は人材発掘が大好きなんじゃないかな？

「じゃあこれならどうですか？

王様に＜インビシブル＞をかけてもらい、エルと話をしているところを見る・・・
これならいいんじゃないでしょうか？
不審な動きをするようであれば、僕たちが戦います。」

なるほど・・・それなら大丈夫かもしれない。
＜インビシブル＞とは姿形を見えなくする魔法で
けっこうな上級魔法です。
それにそれを持続させるにはＭＰの量が問題で・・・

「おお～！それにしよう！エル、宮廷魔法使いに頼んでおいてくれ」

ニィ・・・と王様が不敵な笑みをしました。
エルトリーゼさんはため息でしたが。

「じゃあ、エル。そういうことでいいかな？
俺たちも隣の部屋かなんかで控えてることにするから」

「そうしてくれるなら心強い。」

こうして、王様のワガママにより
謁見の形式が決まったのです。

@

「かけなさい」

エルの声が聞こえました。
エルに「エルトリーゼさん」と声をかけたら怒られたので
私もエルと呼ばせてもらっています。

私と正人は今、エルが日本人と対面してる部屋の隣の部屋・・・
といってもガラスごしなので声も聞こえるし様子も窺えます

どうやら4人組のようです。
二人は学生服を着ていて、一人が茶髪で一人が眼鏡をかけています。
その後ろに二人女の人がいるのですが・・・これは到底日本人とは
思えません。なにせ髪の色からして日本人とはかけ離れているので
す。

一人はピンク色、一人は紫、ピンク色のほうは三つ網をしていて
横にぶら下げていて、紫色のほうはロングに髪を伸ばしています。

「おいユーゴ、エロフだ！エロフですよエロフ！
それも超がつくほどの美少女ですよー！」

な、なにを言ってるのかなあの眼鏡の人・・・

隣を見ると、正人が必死で笑いをこらえています。

「ククククッ・・・初対面でエロフとか・・・
失礼すぎ・・・フフフッ」

楽しそうでなによりです。
ですがこれはエルは怒るんじゃないでしょうか・・・
少なくとも私がエルの立場だったら不愉快ですね。

「落ち着けよ。エルフ、だろ」

今度は茶髪の人のほうが喋りました。
こちらはだいぶ落ち着いた物腰で、
どこか気品があります。

「この地でエルフが珍しいのは分かるが、私は見世物ではない。
ことさらに騒ぎ立てられるのは不愉快だな」

あ～あエル怒ってるよ

「ああっ！ごめんねごめんね！なんというか、あの本物のエロフ
じゃない、
エルフを見たのは初めてだったものだから！
悪気はないんだよ、ほんと。この僕ウォーザードのショウはいつだ
って女性の味方だから！マジで！」

「プハハハッ！」

どうやら正人は堪えきれなくなったようです。
むこうには聞こえていないようですが・・・
それにしても必死ですね・・・
なんというか執念というか・・・

エルはその四人を座らせると
本題に入ったようです。

と、そこで日本人の人たちが机の上に出したのは・・・

（あれって、教団の紋章じゃなかったか？！）

正人が小声で確認を取ってきます。
私はコクコクとうなずくともう一度視線を机に戻します。

あれは教団がかかげるエンブレムのようなものです。
一度ナツキから見せてもらったことがあります。
見た目からして悪の集団ですね・・・

にしても何故あれを持ってきたのでしょうか、
教団だとしたら宣戦布告でしょうか。

さすがにあれを見ると正人も真剣な表情になっています。

「この紋章について、そちらもなにか知っているんだな？」

「知っている」

ユーゴと名乗る者の質問にエルは躊躇なく答えます

「それなら話が早い。
これはギャスパルクという悪魔を復活させてエターナルに破滅をもたらそうとしている
邪悪な教団の紋章だ」

「それもある程度知っている」

まあ、ナツキから聞いてるのでしょう。

「俺たちは彼らを食い止めるべく旅をしている。つい先日のことだが、

彼らはアルダ村の近くにある封印の洞窟にて、ギャスパルクのしもべである魔神を解き放とうとした。

その企みは阻止したが、彼らはエターナルに暮らす全ての人々にとって脅威だ。

教団の規模がどれくらいなのかはまだ不明だが、おそらく、

俺たちのような一個人だけで対抗できる相手ではない。

そこで、彼らの脅威について治安を預かる人物に報せるべきだと考え、

名君と噂されるガルガンシア王陛下に謁見を求めた次第だ。」

ここまで言うということは

まず味方と考えていいでしょう。

教団のメンバーだとしたらこんな情報は出さないでしょうし。

その後もエルとユーゴさんたちの話し合いは続きました。

教団のことや、ギャスパルクのことについてなど・・・

そして、最後にはステータスも見せてもらいました。

ユーゴさんはＬＶ７８のゴーデスナイト

ショウさんはＬＶ５８のウォーザード

これには正人も驚いていました。
ゴーデスナイトとはかなり貴重なクラスらしく、
ほぼ最強だそうです。
さらにウォーザードもＬＶＵＰに膨大な経験値が必要らしく、
５８でも普通のクラスの６５ぐらいはあるそうです。

一応他の二人のステータスも見たけど・・・
まあ、普通のエターナル人でただの農民なら
ごく普通のレベルでした。

そしてユーゴさんたちは自分達が日本人であるとも、
言いました。
教団には日本人が関わってるとも言ったので、
エルももう大丈夫だと感じたのでしょう、
王様が隠れている後ろに視線をやりました。

すると、

「余がガルガンシア３世である」

王様が出てきました。
まあ、ユーゴさん以外の３人は驚いていましたが、
ユーゴさんはいたって冷静です。

「俺たちは最初から謁見していた・・・というわけですか」

「さよう。まあ、許せ、余は国を預かる大切な身、
警護に気を配らねばならんのだ。」

「お目にかかれて光栄です」

つくづくユーゴさんはできた人間だと思う。

「それ、マサトにシオリ、いるのであろう？
出てきてくれたまえ。」

ここで王様が私達の名前を呼びました。
正人を見ると、手招きしていたので
私も正人のあとに続きます。

ユーゴさんたちの前に出ました。
ユーゴさんは正人が学生服を着ていることに驚いているようです。

「すまない。警護のために、君たちの話を聞かせてもらった。
俺たち二人は二人とも日本人だ。
俺はマサトという。それでこっちが・・・」

「し、シオリです。」

私達が自己紹介するとユーゴさんの隣でまたショウさんが「キター
！ロリっ娘だよロリっ娘！」
などと騒いでいました。まったく反省していないみたいですね・・・

「お、面白い人ですね・・・」

私が一応褒めると、
「そう？そうなの！俺は面白くて楽しいウォーザードのショウなのさ！」
何故か自信満々でした。
「ガルガンシア王陛下、少しユーゴたちと話をさせてもらって良いですか？」
正人が聞きました。
このまま王様を無視するのはまずいと思ったのでしょう。
「うむ。構わない」
「ありがとうございます」
正人はそう言うと軽くおじぎをし、
またユーゴさんに向かい合いました。
「教団と戦った・・・と聞いたが
もう教団と剣を交えてるのかい？」
「ああ、さっきも言ったがアルダ村という村の近くの
洞窟で魔神の復活を狙った教団と戦っている。」
正人の目つきもユーゴの目つきも真剣です。
「そうか・・・そうだ、そちらにステータスを見せてもらったのに

こっちがステータスを見せないのは無礼だったな。」
そういうと正人は自分のステータスウィンドウを開きました。
私もそれに倣ってウィンドウを開きます。
「ＬＶ７１の＜ファドラガンナー＞か・・・マサト、君も相当やりこんでいるね？」
「何言ってんだか？ＬＶ７５＜ゴーデスナイト＞なんてユーゴの方がよっぽどやりこんでるじゃないか？」
ユーゴさんと正人は二人で謀ったかのように笑いあいます。
「それにしてもねえ・・・シオリちゃんの＜トラップシーフ＞ってのも珍しいねえ
盗賊系の派生系だよね？」
そ、そう言われても兄がやっていたので分かりません・・・
なんと答えれば良いのでしょうか・・・
考えていると見かねた正人が
「悪いねショウ、シオリは訳あって、この世界のことをあまり知らないんだ。」
正人のおかげで助かりました・・・
「へえ～・・・」
ショウさんが笑いながらジロジロこちらを見てきます。

なにか品定めされてるような気分ですね・・・

「俺たちは、少し前にガルガンシア陛下に会って、
どこに行くか決まるまで、ここに住ませてもらってる。
ユーゴたちはもうどこかへ行くのかい？」

「ああ、俺たちは教団が狙いそうな魔神のいる国へ行って
注意を促そうと思っている。」

さっきっから思っていましたが、
この人はだいぶしっかりした人のようです。

「なるほど・・・」

「もし・・もし良かったら、俺たちと一緒にこないかい？
マサトたちがいたらこちらとしてもすごく助かるんだけど・・・」

お誘いですか・・・
マサトはどうするのでしょう。

「悪い、今はとりあえず人を待っているので、一緒に行動・・・っ
てわけにはいかないかもな
けど、同じ教団を倒すっていう大きな目的を持ってるんだから
何度も共闘することになると・・・俺は思うよ」

マサトが笑うとユーゴも笑って、

「あとで二人で話さないか？マサト。
君とは仲良くなれそうな気がするんだ。」

口調からして少し冗談混じりのようでしたが、
「奇遇だな！俺も思ってたところだ。」
どうやら、マサトは普通に受けたようです。
しばらく二人が笑いあっていると

「ちょっとちょっとお、二人で話進めないでよ～」
ショウさんが出てきました。
まあ、今までほぼ二人で話をしていたようなものですからね。
「じゃあ、この話はまた今度にしよう、ユーゴ。」
「ああ、そうだな、ガンガルシア陛下！話が終わりました。」
「えええ?！これで終わりかい?！」
ショウが悲痛な叫びを上げると他の人たちがクスクスと笑いました。
楽しそうな雰囲気の人たちですね。

ユーゴは頼りがいのある、
いわば勇者のような人でした。
この人なら救ってくれるかもしれない。

そう思わせるような雰囲気が、
このゴーデスナイトの戦士には
備わっていました。

「終わったかな？ならば異国の勇士たちよ、ぜひ見せたいものがある。
ついてまいれ」

楽しい雰囲気から一転、
王様の一言でついていって見たものは
私達の気分を最悪のところまでずり落としてしまいました。

SCENE2－2　ゴーデスナイト（後書き）

ユーゴたちを登場させてみました！

ＳＣＥＮＥ２－３魔神ナディンゴラ（前書き）

更新遅れてしまい、申し訳ありません！
これからは、週一投稿になりそうです・・・

ＳＣＥＮＥ２－３魔神ナディンゴラ

私達の前後を兵士で囲んで、
壁に入っていったかと思うと壁をすりぬけて、
そこには、薄暗い螺旋階段がありました。

ガルガンシア王に連れられて、
暗くどこまで続いているか
わからない、ひたすら下に続く螺旋階段。

降りている途中に、新しく会った
ユーゴたちと色々な話をしています。

「マサトさん・・・でしたよね？
さっき職業を＜ファドラガンナー＞とおっしゃっていましたけど・・・
あなたもファドラ神のご加護を得ているのですか？」

マサトに話しかけたのは、黒髪の村娘のレヴィアです。

「・・・そうだよ～
元々ガンナーだったんだけど、
たまたまファドラ神にあえて、クラスを上げてもらったのさ！」

但し、ゲームの中ですが。

「わ、私もファドラ神を信仰している一人だったのですよ！」

あっちはなかなか会話が弾んでるようです。

「ねえねえ！シオリ・・・だったっけ？
なんでシオリはそんなに強いの！？」

そ、そんなキラキラした瞳で見られても・・・・
この人はイシュラさん・・・でしたか。

こんなところで嘘言うわけにもいかないし、
どうすれば・・・

「わ、私は強くないですよ・・・」

「え？でもレベルも高いしクラスもすごいじゃん」

まあ、兄がやってくれたので・・・

「つ、強さっていうのは、単にレベルの話だけじゃないと、お、思います
わ、私が仮にマサトや、ユーゴさん、ショウさんよりレベルが高かったとしても
私は三人には敵わないと思います」

我ながら変だなあと思いつつも話を続けます。

「わ、私はレベルは高くても高いだけでなにができるというわけではありません。
それは、攻撃が当たればダメージは高いとは思いますが、
攻撃が当たらないんです。
単に戦い慣れてないというか、今でもモンスターを見ると
怯えて、ろくに戦えません。」

イシュラさんはかなり驚いているようですが
続けます。

「だから、ユーゴさんたちと戦って
訓練をつんできたイシュラさんたちとでは、
どちらが戦闘に貢献できるかと言ったら
確実にイシュラさんたちだと思いますよ」

情けないとは思いますが事実なのです。
それに、こっちの世界に来て、
すぐモンスターと戦える正人のほうが
私は信じられません。

それだけ、勇敢なのだとは思いますが・・・

「でもシオリはすごい力を持ってるよ！」

いきなりイシュラさんの口から出てきた言葉に私は驚きました。
今の私の話を聞いてもそうなるのでしょうか・・・
八割方慰めの意味を含んでるとは思いますが

「誰だってモンスターは怖いよ。
師匠も、一回即死魔法を使うモンスターに怯えてた」

師匠というのは、ユーゴさんのことでしょうか。
それは・・・即死魔法を使うモンスターなんて戦いたくないでしょう
この世界で待つＨＰのゼロとは現実世界での死と直結するのですか
ら。

「でも、師匠は戦ったよ！
勝ったんだ！モンスターにも、自分自身にも・・・」

その言葉の意味することに、私はすぐ気付きました。
ユーゴさんはきっと、その恐怖を払いのけたのでしょう。
それは、普通の高校生なんかじゃ真似できないことです。

正人も・・・恐らくはもう怯えてなどいないのでしょう。

「ありがとうございますイシュラさん。
私も、強くなれるように努力しますよ」

そう言ったあとのイシュラさんの表情はどこか満足気でした。

イシュラにも「さん」はつけるなといわれました。
付けないほうがいいのでしょうか？・・・・

しばらく私を含めた六人は
気味悪がっていたものの、
割と普通に歩いていたのですが・・・

「うう・・・なんか、気持ち悪い？・・・・」

最初に違和感を口にしたのはイシュラでした。

「確かに・・・なんか気分が悪いわ・・・・」

イシュラの姉であるレヴィアも
激しい悪寒に襲われているようで、
顔をしかめています。

ユーゴもショウも正人も気付いたようで
顔をしかめていました。

下からのぼってくる
気味の悪い雰囲気に、私も嫌悪感を抱かずにはいられませんでした。
寒気がして、心臓の鼓動も早鐘を打っています。
いったいこの下にはなにが？・・・・

階段を下ってかなりたったと思うのですが、
まだ下に続いています。

「うへー・・・なんなんだよ一体？この気分を害す雰囲気は??」

「・・・少し我慢しろショウ、それは後に分かることだ」

「へーい・・・」

ショウさんはもう猫背になって、ギブアップ間近のようです。

対するユーゴさんはもうなにかを悟っている？・・・
正人とアイコンタクトをとっていたし、なにかに気付いているのかもしれません。

ついに、螺旋階段が終わりました。
そこにはもう何年も開けてないんじゃないかと思われる
錆びた扉。
そして、そのむこうの、とてつもない存在感・・・邪悪な気配・・・
私も、気付いた気がします。

ガンガルシア王が兵士の前に出て
鉄の扉の錠前を鍵を使って外しました。

その時後ろにいた兵士がイシュラに

「あの扉の向こう、いったいなにがあるんです？」
と、声をかけました。
兵士もこの雰囲気の正体が気になったのでしょう。
質問に対してイシュラは、
「えっ？ええと、あたしも知りません。
でも、たぶん、できれば一生知らないほうがいいようなものだと思います。」
と答えました。兵士は「やはりそういうたぐいのものですか・・・」
と言って
引き下がっていきました。
嫌でしょうね・・・
イシュラの言ったとおりできれば見たくないものでしょうから。
エターナルに破滅をもたらす怪物なんて。

っていうか、いつのまにイシュラはユーゴさんと手を繋いでいたの？
まさか、この二人ってそういう関係なのでしょうか・・・・？
ならユーゴさんがこの二人を連れているのも納得ができ・・・
い、いえ
勝手に推測するのはやめます！
いずれ分かるはずですから・・・

扉を開けてその奥にいたのは、
私の期待に見事こたえてくれた
かなりの大きさの怪物がいました。

「うわ・・・。途中から、もしかしたら、って思ってたんだけど。
当たっちゃったよぉ・・・」

ショウさんの呟きが聞こえました。

想像通りの、気持ち悪さ。

光が格子状になって、怪物が出てくるのを防いでいましたが、
その姿はありありと見えます。

伸縮を繰り返すその黒い球体は、体に大小無数の目玉を持っていました。
瞳孔の色はそれぞれで、全てが血走っていました。

私はそれらの目玉から視線をそらすので精一杯でした。
見るとイシュラも肩で息をしていた、顔は真っ青でした。
もしかしたら私も似たような顔をしていたかもしれません。

ふと私達が入ってきた入り口のほうを見ると

扉をまたぐように巨像がそびえたっていました。
見たことがあります。あれは　大地の神、グラ・ド
神像は怪物を監視するかのように
睨みつけていました。

「陛下。あの怪物は、いったい・・・」

「魔神ナディンゴラだ」

王様はレヴィアからの問いかけに
なんのためらいもなく答えました。

ただ、怪物を見据えて。

そのあと、ショウたちが、戦った怪物が魔神であるということを
確信してから、また螺旋階段を昇りはじめました。
行きとは違い、誰一人として声を発しませんでした。

部屋まで戻り、やっと人心地ついたところで
「さてユーゴ、マサトよ」
王様は切り出しました。

「あの魔神ナディンゴラはギャスパルクのしもべだと思うか」
「思います」
「ユーゴと同じです」

まったく躊躇わずに二人は同意しました。

ユーゴさんが言うには、イシュラとレヴィアの二人がいた
アルダ村、という村の近くに封印の洞窟というものがあり、
そこが魔神ヴォイドがいたものの、
そこを守る一族には、＜魔物が際限なく湧きだす洞窟＞としか伝えてられてなかったらしいのです。

それは、意図的に魔神という存在を風化させて、
人々の記憶から消し去ろうとしたからではないか

とのことです。

王様も納得した様子で、
最後に

「余が見せたものについて他言してはならぬ。
王都の地下にあのような怪物がいる、
そんなことを知らぬほうが民も幸せであろうしな」

とだけ釘を刺しました。
そんな、ことはユーゴも正人も分かっていたようで
「心得ています」とだけ返していた。

「ところでユーゴ、マサト、それにショウ。
余が見たところその服は異装なれど、ただの服に見える」
学生服のことだと思う。私は普通の私服ですけど。
まあ、学生服になんか能力なんかついてたら怖いですしね・・・
「これですか？これは国を出たときに着ていたものです。
ただの服で特別な効果はありません」
「お前たちほどの力を持つものは、普通、それ相応のものを身につけているのだが」
「諸般の事情で装備品はたいしたことありません」
諸般の事情って・・・金がないんですよね？分かります
私達もありません。
「なるほど、金に困っているのか。
では率直に言おう。余に仕える気はないか？国を支えるのは人
優れた人材は国の宝。ゆえに余は勇士を好む。お前たちほどの力の
持ち主なら、
すぐにでも爵位と領地を与え、召抱えたい。余に仕えよ。

余の臣として教団について調査するのだ」

爵位と領地って・・・
いきなりすごい話ですね・・・
まあ、でも

「失礼だとは思いますが、お断りします。」
「その申し出は受けられません」

二人の言った言葉は言葉こそ違えど、
意味は同じ。

「なぜだ」

「俺たちは教団を探っています。これと戦い、ギャスパルクの復活を阻止したい。
でも、全てが終わったら日本に帰るつもりなんです。マサトも、そうだよな」

「ああ」

ユーゴさんはやはり大人びていますね。
物腰が落ち着いています。

「ふうむ、、それは残念・・・。だがしかし、気に入った！
教団を敵とするなら、援助してやらねばなるまいて。余から、ささやかながら支度金を与えよう
今後とも教団について探り、新たになにかつかめたならば余に報告せよ。
こちらでも教団について引き続き調査を行い、何かわかったらお前

たちに伝える。
必要とあらばお前たちは余の臣下と力を合わせて教団と戦う。これでどうだ？」

ものすごい好条件ですね・・・
むしろ気が引けるぐらいです。

「それでしたら願っても無いことです。
お金は何かと必要ですし、おれたちだけで教団に対抗するのは難しい。
陛下の後ろ盾を得られるなら、こんなにありがたいことはありません」

「うむ！では決まりだな。エルよ、この者たちに支度金として
五百万Gを与えよ。命令書はすぐに記す」

「かしこまりました」

ご、ごひゃくまん？？？
す、すごい太っ腹な陛下なんですね・・・

「そしてこの者たちの旅路に同行せよ」

「おまかせください」

「ユーゴよこのエルトリーゼは弱冠十五歳だ。宮廷魔法使いとして、
普通ならありえぬほど若い。
しかしほ脳の魔法の扱いに長けたひとかどの使い手だ。頭も切れる。
必ずや役立つであろう」

エルはステータスウィンドウを開きましたた。
パイロマンサーＬＶ３５
普通に考えたらかなりの使い手です。

「お目付け役・・というわけですね」

ユーゴさんが確認するようにたずねると王様は笑いました

「そうだ。分かっているようだな」

「いえ、不快に思ってるわけではないのです。ただし、エルトリーゼ君にはあらかじめ言っておきたい。教団は危険な連中だ
戦力が増えるのはありがたいが、万が一の覚悟は・・・「心配は無用」

エルがユーゴさんの言葉を遮りました。

「私は自分の身を守れぬほど弱くは無い。
戦わねばならぬときには我が炎の呪文を披露しよう」

エルは自信気に語りました。
かなりの自信があるのでしょう。
そのあと、イシュラとレヴィアを軽蔑するように
見つめたのはいただけませんが・・・

「有意義な出会いであった。では、エル。あとは任せたぞ」

「はい」

そう言って王様は部屋を出て行きました。

@

「ついてこい」

エルがどこかトゲのある物言いでそういうと
別の部屋に私達を案内しました。
そこは縦に細長い部屋で、お金のやりとりをしていました。
城の銀行？みたいなものでしょうか。

「お役目ご苦労」

エルは並んでいる人も気にせず先頭に割って入りました。
いくら宮廷魔法使いが偉いとはいえ、
こういう行動は私は好きではありません。

「すいません。本当。並ぶべきなんですけどね・・・」

正人が小声で後ろにいた男性に謝っています。
さすが正人ですね・・・

「おや？エルトリーゼ様。」

奥にいた太っている男性がこちらを向きました

「陛下からの命令書だ。こちらの金額を用意してくれ。」

「うん？五百万ゴールドですと？！これはまた大金ですなあ・・・」

「必要なのだ」

「うらやましい。宮廷魔法使いとなると、こんな大金の運行を任されるのですか」

「私とは無関係な金だ。そこの者達に与えると陛下が決めたのだ」

「ほう、それはまた、なぜ？」

しつこいなあ・・・・

後ろにはもう列ができているというのに

やたらエルと喋ろうとしてきます。

媚売ってるんとしか見えません。

「余計な時間をとらせるな」

エルもだいぶイラついていたようです。

「命令書の指示に従って速やかに支払え。それが君の役目だろう」

「これは失敬。すぐに用意いたしますのでお待ちを」

そういってすぐに太った男性は

宝箱？のようなものを持ってきた。
それを受け取るとユーゴは
「思いもかけず資金ができた。
早速だが、街へ出て装備を買い揃えよう」

こうして、私達はユーゴたちに同行して、町に買い物にいくことになりました。

最初は正人は五人で行ってくることを薦めたのですが、
ユーゴが「陛下は俺たち六人にくれたんだ」といって、
さすがに正人も断れず、私達もついていくことになりました。

買い物をして、少し気が晴れるといいのですが・・・
私の脳裏にはまだ、あのおぞましい怪物が焼きついていました。
この時は二度とあんな怪物になど会いませんように、と

無理な願いをしたのでした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2757z/

もう一つの「ろーぷれわーるど」

2011年12月16日20時48分発行